

## 二十二、今にのこる 千二百年前の地割のあと

篠栗病院の敷地の北のへりは白いフェンスで囲まれています。その外に沿った小溝は、田中区と尾仲区の境になっています。その線を西に延長していけば、交通機動施設の前の大路になって、それはいわゆる津波黒道に直角にぶつかります。しかしその線はそこでとぎれるわけでなく、やがてりつばな農道となつてまっすぐに延びていき、尾仲区と津波黒区の境になっています。和田区と乙犬区の境になっています。つまり、東西にはぼ一直線に延びるこの線は、篠栗平地の村々と田園をはつきりと南北に分かつ境界線になっています。

この線はいつたい、いつごろ、どんな理由で引かれたものでしょうか。

おどろくなかれ、これは約千二百年も前に、奈良時

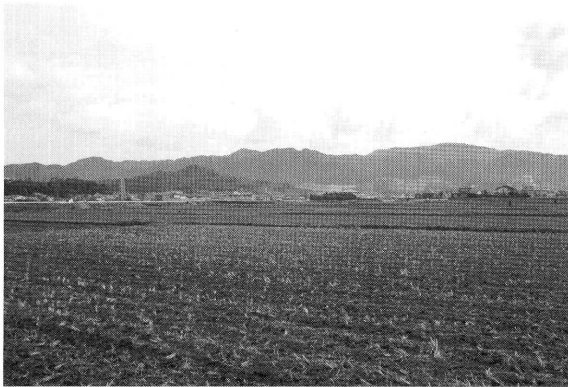
しかし、そんな気分を味わうにつけても、鉄の農具もまだゆきわたっていなかった昔、郡司とか里長などの官名を持った豪族に使役されながら、この大工事に挑んだ農民たちの厳しい苦労を忘れるべきではないでしょう。

篠栗古文書会 高橋 健吾

代から平安時代にかけて、いわゆる条里制による大規模な田地の地割がおこなわれたときに、条里の基線のひとつになったものだと考えられているのです。

これらの基線をもとに、土地は道路と水路によって一町歩（一町歩の正方形に区画されていたわけですが、日野尚志氏という研究者は、篠栗盆地の条里を、まとめて勢門条里区と呼んで、その区画線は正確には北方向から七度だけ西にそれているとします。

それはともかく、この条里制によって、今にいたるまで篠栗の田園地帯に、道路・農道・水路が東西南北に直角に交わり、農地が整然と並ぶという景観の骨組みができあがったわけで、J R篠栗線の車窓などからその景観を眺めると、なにか爽快で豊かな気分させられます。貝原益軒が「筑前国続風土記」の中で、迫門河内（篠栗盆地）は「国中第一の膏腴（よよく肥えた）の地なり」と述べているのも、彼が篠栗を見て回ったとき、こんな気分になったせいかもしれません。



勢門条里区の基線のひとつとされる地割線